

「主日に諸聖徒日を祝う」

(マタイによる福音書 5:1-12)

祈祷書の1ページ目に、「主日は、教会暦の中でイエス・キリストの復活にまでさかのぼる根源の祝日なので、すべての祝日に優先して守られる。」と記されています。しかし、今日の主日は諸聖徒日としてお祝いします。毎年11月1日は諸聖徒日ですが、11月1日が主日と重なった場合には、諸聖徒日としてその主日を守る事になっているからです。通常、祝日が主日と重なった場合には、大抵が主日の翌日へとずらされます。しかし、主イエスに直接関係する祝日、主イエスとともに歩む教会暦においても重要な祝日（たとえば主イエスの命名の日、被献日、主イエス変容の日）が主日と重なった場合にはそちらが主日に優先されます。では、諸聖徒日どうでしょう。主イエスのご生涯と直接関係が無いように感じられます。そのような祝日で、主日と重なった場合に守られる祝日は他にありません。しかも、祭職は白です。これも主イエスに直接関連する祝日以外では数少ないものです（他に福音記者聖ヨハネ日、聖パウロ回心日など）。わたしはずっとこのことを疑問に感じていました。なぜ、もっとも大事な主日なのに、諸聖徒日を祝うのか。歴史を紐解いてみても、キリスト教のかなり初期の段階から殉教者への高い崇敬をささげ、その逝去記念日には特別の礼拝をささげたことや諸聖徒日が祝われるようになった経緯は分かりますが、主日に守られる理由はどうもはっきり分かりませんでした。

しかし、11月1日の諸聖徒日を年ごとに祝う中で、少しずつその意味が分かるようになってきたように感じています。それは、この諸聖徒日こそ、主日の大切さ、主日の喜びに溢れた日だと感じられるようになったからです。わたしたちは主日ごとに、主イエスのご受難とご復活を記念しています。この主イエスのご受難とご復活こそ、諸聖徒日のお祝いの根本にある出来事なのです。生も死も超えた神の世界にわたしたちが生き続けることを約束された出来事こそ、主イエスのご受難とご復活です。主イエスの死と復活があったからこそ、主日の聖餐式ごとに「天の全会衆とともに」わたしたちが交わることができます。主イエスの死と復活の出来事によってこそ、生も死も超えた交わりが、わたしたちクリスチャンには実現するのです。このことに思い至るなら、諸聖徒日とは、わたしたち自身が主イエスの死と復活の出来事を、「わたしの出来事」として自覚する日だということが分かるはずです。毎週の聖餐式を通して、またわたしたちが信仰の先達たちを思い起こす時、そこにすでに神のもとに召された人々が共におられるのです。そして、その世界に、わたしたちはすでに迎えられおり、いずれわたしたちが死を迎えてなお、この交わりのなかで生き続けるのです。それはすべて、主イエスの死と復活によってわたしたちに約束された出来事であり、諸聖徒日にはその恵みをあらためて感じ、天の全会衆とともにこの日を祝うのです。

今日の特祷で、「主に選ばれた人々」という言葉があります。もしかすると「わたしなどは選ばれていない」と感じる方もおられるかも知れません。しかし、パウロが繰り返しクリスチャンたちに「キリストに結ばれている聖なる者たち」と呼びかけるように、「主に選ばれた人々」とは、「立派な人」や「信仰に篤い人」ばかりをさすのではなく、すべてキリストの死と復活にあずかって信者となった人を指すのです。神は信仰深さや敬虔さを条件に天国の門を開いたり閉じたりはしません。むしろわたしたちに求められていることは、そこに「こんなわたし」であっても招かれていることを喜び、ともに祝うことです。

神は、主イエスの死と復活を通して、わたしたちが死で終わらない、その先があることを教え

てくださいました。わたしたちクリスチャンは、主のもとで続いていく命が保証されています。死してなお、生きるのです。それはすなわち、死が象徴する「絶望」の先がある、「もうダメ」の先がある、ということが約束されている、ということです。必ず希望がある命、それがクリスチャンの命です。今日指定されている福音書は実は2箇所あります。礼拝ではマタイを読みますが、いずれも「幸い」の箇所です。「心の貧しい人は幸いである。」から始まるこの箇所は、生きていくなかで、ことに絶望にあるとき、最もわからなくなる箇所でもあります。しかし、今日それが読まれるのは、まさに諸聖徒たちの生涯に思いをするとき、このみ言葉が本当であることがわたしたちに証しされているからです。困難の中で、また苦しみの中で亡くなっていった命もすべて、このみ言葉に照らされ、神のもとにある希望によって生き、神のもとにある命を得ました。今日憶える先達お一人ひとりのご生涯こそが、「貧しい人は幸いである」というみ言葉が「本当だ」ということを証ししているのです。だからこそ今日は、そのことを何よりも信じ、一人ひとりの聖徒たちに働かれた神の恵みをあらためて感じ、その恵みに生きたすべての命を憶えて、祝いましょう。

主イエスを信じ、従って死んでいった諸聖徒たちが、主のもとで生き続けていることを憶え、その生き方に励まされて、わたしたち自身が歩みをあらたにするのが諸聖徒日です。憶えるのは聖人だけではありません。明日は諸魂日。今日明日と、わたしたちはすべての死者を憶えるのです。そしてこの二日間をとおして、死では終わらない、希望の世界をあらためて信じ、感じ、信仰を新たにされるのです。だからこそ、祭色も復活の「白」なのだと確信しています。復活の輝きに照らされて、この日を祝いましょう。この信仰をわたしたちにまで紡いでくださったすべての先達に感謝しつつ、今ここに天の全会衆との交わりが続いていること、実現していることをあらためて感じ、感謝と賛美の礼拝をささげましょう。